

教師の指導力向上につながる校内研究支援の在り方

－対話的な学びの充実につながる校内研究支援を通して－

主 査・指導主事 平井 規夫
主 査・指導主事 小林 美佳
指導主事 鈴木 高德

副主幹・指導主事 天野秀太郎
主 査・指導主事 坂本 久美
指導主事 一瀬 大樹

【キーワード】 学級づくり 対話的な学び 授業改善 リフレクション

研究の概要

研究推進校(山梨県総合教育センターが校内研究を支援・サポートする学校 以下推進校)における授業改善の支援の在り方に関する研究を行い、「主体的・対話的で深い学び」の視点を明確にした授業づくりに寄与する。研究期間は2年間の基本とし、今年度はその1年目である。

中学校チームの研究主題と副主題は、次のとおりである。

教師の指導力向上につながる
校内研究支援の在り方
～対話的な学びの充実につながる
校内研究支援を通して～

推進校の研究主題及び副主題は、次のとおりである。

研究推進校 都留市立都留第一中学校

他者と協働し、
主体的に学びに向かう生徒の育成
～協働できる集団づくりを通して～



都留市立都留第一中学校

I 主題設定の理由

各学校では、学校の特色を生かした校内研究を

推進しているが、教育課題が多様化・複雑化する教育現場において、校内研究の運営に多くの学校が様々な悩みを抱えており、研究の成果が教員一人一人の授業改善につながっていないという現状がある。そこで本研究では、校内研究支援の在り方を探るにあたり、対話的な学びの充実の視点を明確にした授業改善につながる校内研究に着目することとした。

対話的な学びの充実の視点からの授業改善を行うには、生徒の実態把握が欠かせない。また、推進校のニーズや実態に即した内容としていく必要がある。そこで、推進校で実施しているQ-Uの結果分析を、授業改善のためのツールとして用いていくこととした。結果分析を通して、推進校において、教諭全体で自身の授業を見直し、授業改善につなげることができ、目的を明確にした授業づくりにつながれると考える。

II 研究の目的

推進校のニーズや実情を大切に、教員一人一人の授業改善につながる校内研究の実現を目指す本センターの研究支援が、推進校に対してどのような成果と課題をもたらしたかを検証し、校内研究の支援の在り方を探る。

また、教員一人一人の主体性の向上と授業改善につながる校内研究が、推進校を含めた多くの学校において実践できるよう、学校の特徴を生かした実践に寄与するとともに、事例の蓄積を通して、本センターのシンクタンク機能の充実を図る。

III 研究の方法

本研究の方法は以下のとおりである。

- ・研究主題を具現化するため、学習会、指導案検討、研究授業、研究会における指導助言の方法や内容について、情報提供や指導・助言をする。
- ・日頃の授業の様子を参観し、校内研究の成果を

どのように授業へフィードバックしているか情報を交換する。

- ・教師自身が変容を自覚し、見取るため、校内研振り返りアンケートを活用し、その記述とアンケートの結果を検証の手立てとする。

IV 研究の経緯

1 センター研究日

4月15日(月) オリエンテーション

4月16日(火) センター研究

- ・令和6年度の研究支援計画、内容について

5月14日(火) 研究計画発表会

5月20日(月) 山梨大学連携教育研究会

6月18日(火) センター研究

- ・1学期の支援内容についての検討、確認

7月16日(火) センター研究

- ・夏期休業中の支援内容についての検討
- ・中間発表会に向けて

9月19日(木) 中間発表会

10月17日(木) センター研究

- ・2学期の支援内容についての検討、確認

11月19日(火) 山梨大学連携教育研究会

12月12日(木) センター研究

- ・3学期の支援内容についての検討、確認
- ・センター研究発表大会に向けて

1月15日(水) センター研究

- ・所内発表会の検討、確認

1月22日(水) 所内発表会

2月6日(木) センター研究

- ・センター研究発表大会についての確認
- ・研究紀要の検討

2月26日(水) センター研究発表大会

3月4日(火) センター研究

- ・来年度の方向性の検討

2 研究推進校訪問

4月12日(金) 学校訪問

- ・研究の方向性について打合せ

6月14日(金) 学校訪問

- ・校内研進捗状況確認
- ・研究支援の内容確認

7月3日(水) 校内研究会

- ・座席表を使用した授業分析

9月4日(水) 学校訪問

- ・センター指導主事による授業観察
(国語科、社会科、数学科、家庭科)

9月17日(火) 校内研究会

- ・Q-U学習会(講師:センター指導主事)

10月22日(火) 学校訪問

- ・センター指導主事による授業観察(家庭科)

11月18日(月) 学校訪問

- ・センター指導主事による授業観察(美術科)

11月25日(月) 学校訪問、研究授業

- ・初任者による研究授業(家庭科)、検討会

1月14日(火) 校内研究会

- ・Q-Uの結果を用いた学級分析

1月29日(水) 学校訪問

2月3日(月) 校内研究会

- ・今年度の振り返りと来年度の方向性について

V 具体的な取組

本センターの機能を活用しながら学校全体の授業力向上を目指し、教員一人一人の授業改善につなげるとともに、年間を通して校内研究の目的が意識できるよう支援を行った。その研究支援が推進校のニーズに応えるものになるよう、管理職や研究主任との相談の上、支援計画を決定した。設定する際は、推進校の主体性を大切にしたい。

今年度、本センター行った主な研究支援は、以下の3点である。

- 1 校内研究会リフレクションシートの提案
- 2 校内研究主題に関する学習会
- 3 指導案検討、研究授業の実施(家庭科)

1 校内研究会リフレクションシートの提案

推進校では「他者と協働し、主体的に学びに向かう生徒の育成～協働できる集団づくりを通して～」を実現するため、研究の柱を設定した。「柱1 居心地のよい学級づくりのための、教師の指導力向上」「柱2 授業研究を通じた教師の授業スキル向上と生徒の学力向上」の2つである。そして今年度は「柱1」を中心に校内研究に取り組んできた。

研究主任との相談を通して、本センターの研究支援の一つとして、校内研究会での先生方の学びを自分事として捉えられる、また研究会での学びを価値づけるための支援を計画した。

年間を通して記録していくものと、毎回の校内研で使えるものとして提案した。年間を通したものは、「年度はじめ」「年度途中」「年度末」の大きな期間の中で、校内研究主題の実現に向けて、自分がどのように取り組み、どのようなことを考えているのかという点を省察できる内容をパッケージとして提案した。また、毎回の研究会を振り返る内容として「満足度」「満足度に対する理由」「今日の研究会の内容から具体的に組みたいこと」を記録できるものを提案した。

研究会の内容により、推進校の職員に記録をしていくことを依頼した。

2 校内研究主題に関する学習会

推進校では、OJTの活性化を目指しており、校内研究会以外の時間でも職員同士で対話を積極的に行う機会を設けている。

研究主任とのやり取りを通して、経験豊富な先生を中心に、目の前の子供について分析したり、時には勘も働かせたりしながら対話が行われている様子を知ることができた。

そこでセンターの研究支援として、本センターの機能を生かして、推進校の実情を支える形として、理論を提供する機会を設けた。具体的には、推進校で取り組んでいるQ-Uをどのように分析していくかという点について研究会の中で学習会を計画した。

3 指導案検討、研究授業の実施(家庭科)

推進校の管理職、研究主任の先生方と研究支援について相談を重ねる中で、初任者の先生への支援がニーズとしてあげられた。複数名いる教科であれば、相談も具体的に行いやすい点はあるが、実技教科により一人で全学年を初任者の先生が担当することへの負担に対してのものである。

そこで、今年度は家庭科の授業を中心に授業観察を行い、指導助言を重ねながら研究授業、研究

会の機会を設定した。初任者研修などを通して面識のある、同じ教科を担当する指導主事を中心に、指導案検討や授業に向けての相談に積極的に応じる機会を設定した。また、山梨大学のアドバイザーも参加しながら、様々なアプローチからの支援に取り組むことを計画した。

VI 研究支援の実際

1 校内研究会リフレクションシート

推進校は各学年2クラス規模となっている。推進校の校内研究は、今年度と来年度の継続研究を基本としており、今年度は1、2年生、特に2年生の2クラスを中心に、校内研究の柱1である学級づくりについて推進校の職員全体で考察を深めていくことを軸とした研究を行っている。日頃の授業観察を軸として、生徒の活動の様子を中心に現状分析を行う。職員で分担を決めて、授業観察を行い、校内研究会を中心に、学年組織や学年を超えた職員同士の対話により、生徒の様子について情報交換を行っている。

そこで、本センターから提案した校内研リフレクションシートを活用し、校内研究会における個の学びを全体で共有できるよう支援を行った。

以下は、推進校職員によるリフレクションシートの記述である。各コメントの前にある数字は、校内研究会の内容に対する満足度であり、満足度に対する理由を合わせて記述している。

- ・ 5 2年1組の集団の分析を通して、個々の生徒や小グループ、クラス全体に対する新たな視点や留意すべきことを学ぶ事ができた
- ・ 5 他の先生方と時間をかけて話をする事で、自分にはなかった視点や気づきが多く得られた
- ・ 4 クラスとしてより良い方向へ向かうための方策を、個人・班単位で具体的に考えられた
- ・ 4 自分のクラスではどうかな、どんな風に応用できるかなと考えながら参加できた
- ・ 5 学級についての新たな学びがあった
- ・ 5 学級の状況や、授業の見方など多くの面を学ぶことができたのでよかった
- ・ 5 授業の様子を分析して、学級経営を考える

のが面白かったです。授業中の話し合いのリーダーを育てるために、まずクラスで認められる場を作ることに力を入れたと感じました。

校内研究会で行っている内容に対して、推進校の職員の満足度は平均すると4.7と高く、話し合いを通して学級分析を行う進め方を通して、校内研主体に対する様々な学びや気づきがあったことがシートの記述から見られた。

また、リフレクションシートの項目にある「研究会の内容から具体的に組みたいこと」の記述は以下のとおりである。

○今回のワークショップの内容を自分の学級にどのように活かすかを考えていきたい。特に、学級活動や授業を通して生徒同士の関わりを深めることや個別で話す時間を設けたり、こちらから全体で認める場を作れるように仕組んだりしながら、リーダーを育成することに取り組んでいきたい。

○生徒間の関わりを増やすために、まずは自分自身が生徒と人間関係をつくること。個々で話が必要な生徒、全体で話が必要な生徒、適した場面で指導をすること。先生方と話をすることで気づけなかった視点が見えてくるからこそ、多くの先生に相談をすること。

○朝の会、帰りの会でのミニレク

○教科担当の先生をはじめ、多くの先生方との情報共有をもっとしようと決意しました。

ここでは、今年度の校内研究の柱である「学級づくり」に対して、具体的な取組を挙げながら振り返るコメントが見られた。

校内研究会で得ることができた個々の学びや気づきをアウトプットし、情報を共有することで、校内研究会として職員全体として価値づけることへと繋げることができた。



図 校内研究会の様子

2 校内研究主題に関する学習会

研究推進校では、研究主任を中心として、校内OJTの活性化を目指している。校内研究会の機会だけでなく、日頃から授業参観や対話の場を職員同士で積極的に行いながら、研究主題の達成や日々の生徒への対応について協議することがあると研究主任も理解している。

そこで、本センターの機能を生かしながら、推進校に対して理論を深めていく機会を設ける支援を計画した。

推進校ではWeb Q-Uによる学年や学級の分析を行っているが、より推進校全体で分析力をもって学年や学級を見ることができるとをねらいとした学習会である。

本センター相談支援センターの指導主事と連携を取り、まずは推進校の学年や学級の現状把握から行った。そして、現状に対してどのようなアプローチを行うことができるのかという点を重点的に説明することを方向付けた。

研究主任の先生と情報交換を行い、事前に推進校でどのようにQ-Uの結果を分析しているのか把握し、当日の学習会を行った。学習会での講義内容は以下の内容である。

<主な講義内容>

- ・校内研究主題と山梨県学校教育指導指針との関わりについて

- ・Q-Uの特徴、質問項目や内容について

- ・分析結果の見方、配慮や対応例について

- ・学級集団づくりに関する情報提供

学習会を受けて、推進校の職員によるリフレクションを行った。以下、各コメントの前の数字は、学習会に対する職員の満足度であり、コメントは満足度に対する理由の記述である。

- ・4 生徒の変容の見取り方や学級の様子について理解することができたから。

- ・5 個々の生徒の様子を分析するディスカッションが有意義であった。また、生徒を見る視点もとても勉強になった。

- ・5 学年やクラスについて分析する中で生徒理解につながったり、支援に向けた方策を立てるヒントが得られたりしたと感じたからです。

・ 4 5でも良いと思いますが、私が不勉強でお役に立てず、また、学ぶことも充分にはできなかったもので、次に向けての4。

職員全体の満足度平均値は4.6であった。記述から、生徒理解のためにQ-Uをどのように利活用していけばよいかという知識や理解につながっていたといえる。また、学習会の内容をきっかけとして、内容をより理解していきたいといったコメントがみられたことも特徴的であった。

学級づくりにおけるQ-Uの在り方についての意識を高めるという点においては効果があったといえるが、校内研究主題の達成に向けて、対話的な学級づくりへどのようなことを具体的に実行していくのかという点や、授業実践にどのように活用していくのかという点について、理論と実践を繋ぐような支援を行っていくことが来年度の課題ともいえる。

3 指導案検討、研究授業の実施

(1) 取組の概要

本センターの中学校チームでは、推進校の生徒の状況や日頃授業がどのように行われているかを把握するため、推進校の管理職や研究主任に協力を得ながら、校内研究会だけでなく、定期的に学校を訪問し、授業参観する機会を設定した。

今年度推進校では、校内研究の柱である学級づくりを中心に研究を進めており、学級づくりを土台としながら一人一実践を軸に授業改善について研究を進めていく計画を立てている。授業改善に関しての研究支援について、推進校との協議の中で、実技教科はどうしても人数が少なく授業改善について相談する機会が少ないことや、新任者のフォローアップが推進校のニーズとしてあることを把握した。そこで、今年度は校内研究の計画に沿いながら、家庭科の授業改善を軸に支援を行うことへ方向付け、研究授業や学習会の実施を提案した。

(2) 研究授業、授業研究会

ア 授業の概要

・ 日時 令和6年11月25日(月) 3校時

- ・ 対象クラス 1年1組
- ・ 技術・家庭科(家庭分野)
- ・ 題材名 B 衣食住の生活
(2)「中学生に必要な栄養を満たす食事」

イ 指導案検討

- ・ 授業者から研究授業の1か月ほど前に指導案を送付してもらい、授業内容を検討ながら5～6回程程度、指導案の内容の修正を行ってもらった。
- ・ 指導案に記載すべき内容は、教科の特性によって基本となるものがある。そのため、国立教育政策研究所の資料を参考にしながら評価規準、指導の計画など必要な情報を付け足した。
- ・ 中学校の家庭分野の教諭は、全学級の授業を週1～2時間ずつ担当することが多い。授業者自身が担任する学級や学年以外は、普段の生徒との関わりが薄い場合がある。そこで助言として、日頃から学級担任と情報交換をしたり、Q-Uの結果等から、生徒の様子を把握したりすることが大切であるという内容を伝えた。
- ・ 校内研究主題が「他者と協働し、主体的に学びに向かう生徒の育成～協働できる集団づくりを通して～」であるため、家庭科の授業においては、小グループや班での話し合い活動を意図的に取り入れることで、協働できる集団作りを目指して授業を計画することを提案した。
- ・ 少人数の班の中で、自分の実践について発表し合う活動を取り入れ、他者の意見を参考にしながら自分の実践を見直し改善する授業を仕組むことを提案した。また、Q-Uの結果や日頃の授業の様子から、グループの中でも意見を出すことが難しい生徒や献立を考えることが難しい生徒については、机間巡視の中で声をかけ、個別で指導していくよう助言した。
- ・ 当初の授業計画ではICTの活用場面がなかったが、推進校では1人1台端末のロイロノートを活用しているとの現状を知り、個別の活動の場面、協働的な活動の場面にICTを活用する計画に修正していくことを提案した。

ウ 授業実践

- ・本題材の指導にあたっては、成長期の中学生に必要な栄養素を満たす1日分の献立を食品群別摂取量の目安を参考にしながら作成し、栄養のバランスがとれ、さらに自分の食生活の問題を解決できるような食事を作成することをねらいとする授業実践を行った。
- ・前時までに、ICT機器を活用して自分の食生活の問題点を見だしてまとめ、それを改善できるような献立を個人で作成しておく。本時では、各自が作成した献立について小人数のグループ内で発表し合い、お互いの献立のよい点や改善点を考え、ロイロノートの機能を活用してコメントを送り合う活動を仕組んだ。この場面において、校内研究の柱となる学級づくりを土台とした対話的な学びがどのように生かすことができているかを見取る。
- ・グループ活動の後は再度個人での活動に戻り、改めて自分の献立を見直して、友達からのコメントを参考に改善を図る時間を設定した。
- ・終末のまとめの場面では、献立作成を通して、これからの食生活について考えたことや実践していきたいことを記入させ、数名の生徒に発表させた。



図 授業実践の様子

エ 研究協議

- ・本センター指導主事から研究支援についての説明、研究主任からの取組の概要説明、授業者からの授業内容についての説明があり、その後参観者のグループ協議と協議内容の発表が行われた。
- ・参観者は、推進校の教職員、本センター中学校チーム担当指導主事、家庭科担当（本センター指導主事、山梨大学教職大学院教授・都留文科大学非常勤講師）の3つのグループに分かれ、それぞれの立場から授業実践に対して意見を出し合っ

た。

- ・推進校教職員グループでは、以下のような意見が出された。

○交流におけるグループの人数について検討していくことが授業を考える上では必要である。本時の授業では、ペアで学習を行うことが最も適した形であったのではないだろうか。

○授業の内容を考えた上で、適切にICT機器を活用することは、学校全体で考えていくべきことである。

- ・家庭科担当グループでは、以下のような意見が出された。

○授業者が終始明るくはきはきとした様子で授業を行い、指示も明確であった。

○日頃から授業を担当する学級の生徒と関係を築き、授業に生かしている様子が伺えた。

○個別の場面と協働的な場面でICTを取り入れた活動を仕組むことができた。

○対話的な学びの場面でICTを活用していたが、直接的な対話とICTへのコメント入力のバランスや授業の流れを検討しなければならない。

○当日欠席の生徒がいて、グループの人数構成に偏りが出てしまい、時間配分が難しい場面が見られた。臨機応変に対応する必要がある。

○最後のまとめの場面では、献立作成に焦点を当てて生徒に考えさせていたが、題材全体のねらいを踏まえて発問できるとさらによい。

- ・センター指導主事からは、以下のような意見を出した。

○対話的な学びを行う上で、交流の内容や方法について、生徒からどのような意見が出されるかという点を事前に授業者が想定しておくことが大切である。

○ロイロノートなど、生徒の考えがアウトプットされたものを交流することで、協働的な学習へと発展していく。アウトプットした後に出されたものをどのように扱っていくかを考えておくことが必要である。

○教科で学んだことを、家庭や実生活に生かしていけるような繋がりをもたせることをイメージしながら授業を行っていく。

また、山梨大学教職大学院連携教育研究会アドバイザーである山梨大学萩原教授からは、個別最適な学びと協働的な学びの一体化を充実させることの必要性や、家庭科という教科の特性を生かして生徒にどのような資質・能力を育成していくことを教師が目指して授業を重ねていくべきであるかという指導・助言を授業者へ行った。



図 研究会の様子

オ 成果と課題

- ・研究授業を通して、初任者の教科指導に関する指導・助言について時間をかけて行うことができた。
- ・指導案づくりを通し、題材の指導計画と評価規準・評価方法等を考えることによって、題材全体に流れのある問題解決的な学習を仕組むことができた。
- ・個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させるという視点を踏まえて、授業をつくることができた。
- ・ICTを全く使わない授業から、ICTを活用した授業へと変換させたことで、今後もICTを文房具の一部として日常的に使うことを念頭に授業を仕組んでいただきたい。
- ・授業の中で対話的な学びを仕組むためには、その元となる協働的な集団づくりが必要である。今回の授業者はクラスの生徒との関わりが授業以外にあまりなかったため、来年度研究授業を行う教科担当は、授業を行うクラスの担任であることが望ましい。
- ・授業改善について、経験年数の少ない教師に対して、指導案作成から当日の研究会までの流れを伴走支援することにより、校内研究の内容を基にした授業づくりを行うことへと繋げることができた。また、推進校の一人一実践を基にした研究計画から大きく逸れることなく、授業や

研究会を実施することができた。

Ⅶ 今年度の研究支援全体のまとめ

1 研究支援全体の成果

- ・推進校の管理職や研究主任と情報交換を行いながら、学校訪問や研究会の内容についてセンターから進言していくことで、推進校のニーズや実情を大切にしながら研究支援を行うことができた。
- ・リフレクションシートとして振り返りをアウトプットし形として残していくことや、校内研究の内容に関する学習会を行うことを本センターから提案、実施したことにより、推進校のニーズである、生徒同士が対話を行う上での土台づくり(安心安全なクラス環境・集団づくり)の意識を推進校の教師が高めることができた。
- ・教科学習会の企画、実施を通して、校内研究との関わりを意識した授業改善に繋げることができた。また、授業を計画する段階から支援を行うことで、授業者が指導案作りの段階から授業改善するきっかけを与えることができた。

2 研究支援全体の課題として

- ・リフレクションシートの有効性を高めるために、記述する時間を校内研の中に位置づけることを徹底するなど、推進校の研究主任と活用方法について検討したり、先生方の記述に対して、センター指導主事が必要に応じて助言を行ったりする必要がある。
- ・学級づくりのための学習会やQ-Uによる、個人・集団の分析をどのように授業へ生かしているかという点の見取りについて、次年度以降の校内研究計画に沿ったものとなるように、推進校との協議を重ねていき、より具体性のある提案を行う必要がある。
- ・今年度は、推進校と検討する中で、教科を家庭科に限定して研究授業や研究会の支援を行い、一定の成果を得ることはできた。しかし、直接支援していない教科については授業

改善の状況の把握が不十分であった。来年度以降は、推進校全体で授業改善を進めるための支援を行っていきながら、それぞれの教科に具体的につなげられるような支援を行っていきたい。

3 来年度に向けて

- ・2年目となるので、推進校とより一層共通理解を図り、校内研究主題の実現に向けた、本センターの研究支援を進めていく。
- ・本センターのシンクタンク機能を生かし、推進校が研究したい内容に沿った学習会等の提案をする。また、今年度同様必要に応じて、チームの枠を超えた研究支援の内容についても検討していく。
- ・1年目の研究を基盤としながら、リフレクションシートの活用を形骸化させず、毎回の校内研究を全体で振り返る中で、教員の授業改善をより具体化していく。

おわりに

中学校チームでは、2年間の研究支援の1年目として、推進校の現状を把握し、ニーズに沿った支援を中心とした取組を行ってきた。学級づくりから授業づくりへとシフトしていく2年目に向けて、推進校とより一層の共通理解を図りながら校内研究への支援を進めていきたい。

また、研究支援の取組を、県内中学校の校内研究の活性化へと寄与していくものとするため、発信していく内容や方法について、推進校やチームで更に検討を重ねていく。

【引用・参考文献】

- ・文部科学省(2023)第4期教育振興基本計画
- ・山梨県・山梨県教育委員会(2024)
山梨県教育大綱・山梨県教育振興基本計画
- ・河村茂雄他編著(2008)Q-U式学級づくり
図書文化社
- ・河村茂雄他編著(2004)Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド 図書文化社
- ・河村茂雄編著(2011)実証性のある校内研究の進め方・まとめ方～Q-Uを用いた実践研究ガイド～ 図書文化社

- ・指導と評価(2015、2016、2017、2018) 図書文化社
- ・岡山県教育庁人権教育課(2019)落ち着いた学級づくりにむけて～Q-U、hyper-QUを活用した課題対応～
- ・文部科学省(2018)中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編
- ・文部科学省(2018)中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 技術・家庭編

【研究推進校】

都留市立都留第一中学校 校長 岩澤 宏行

【山梨大学連携・教育研究会アドバイザー】

山梨大学 客員教授 秋澤 英俊
山梨大学 客員教授 河西美代司
山梨大学 教授 萩原 佳子

【総合教育センター 研究アドバイザー】

次長(義務) 重田 誠
業務推進(主任) 伊藤 毅